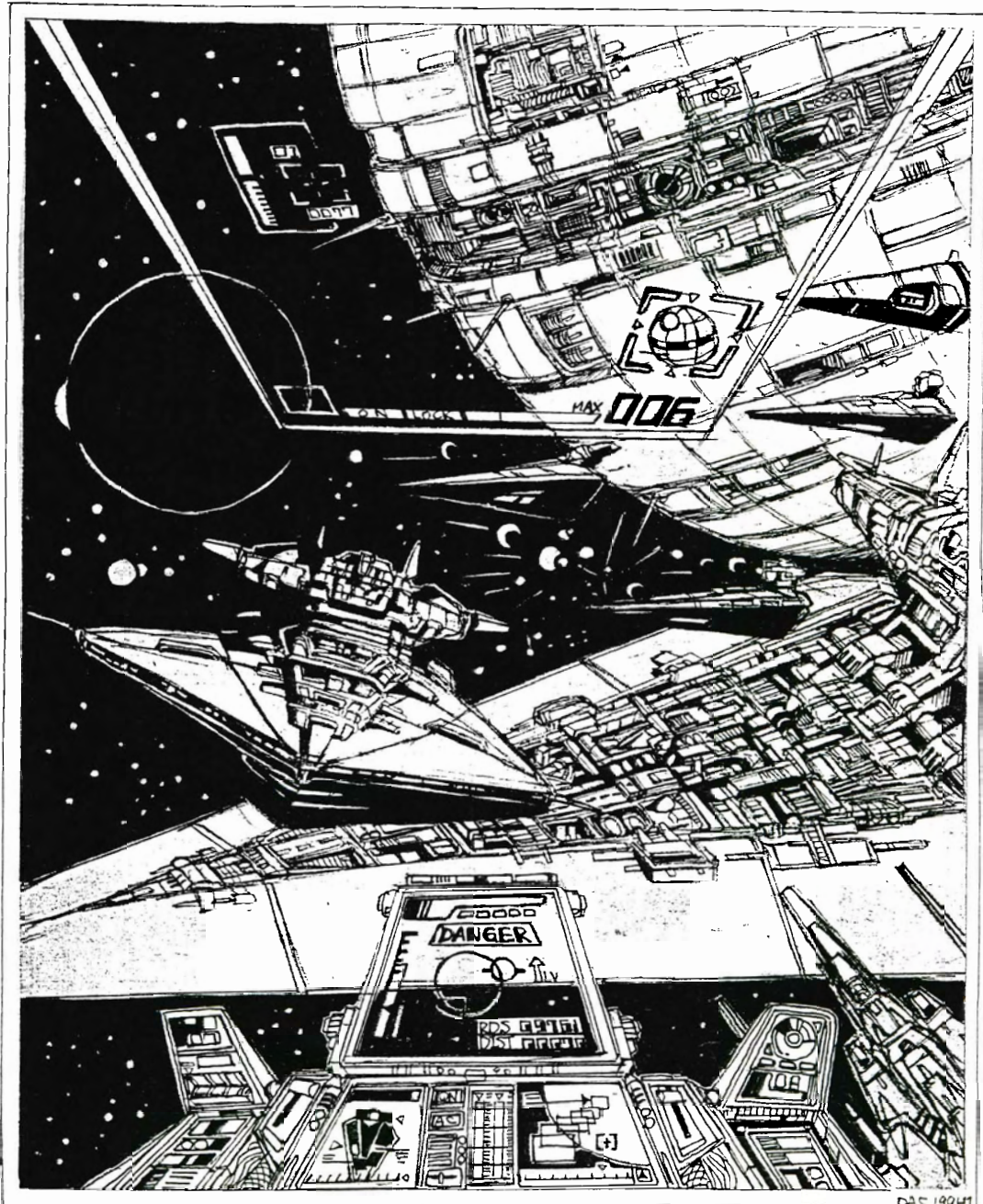


# Blowers Vol. 4



# めにう ~MENU~

- 3~6 PEACE PRESSER MAYA 文・本居こじ  
絵・EPST DARIUS・5
- 7~13 Damyan=Kizaki's Road of The Messiah. Damyan=Kizaki
- 14 予 告 EPST DARIUS・5
- 15~20 真鶴学園風雲録 全体リプレイ  
真鶴レポート 岬当麻
- 21~26 LOOK OUT! EX. SYSTEM
- 27~28 行け行け外回り! ~紀州 御坊編~ 宇垣麻美

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み200円）が必要です。今回は12/15までにアクションを送って下さい。

※今回 ただのりな さんご多忙につき、関連記事は一切休載いたします。

※今月は「遅れを取り戻せ緊急事態だぜ、ベイビー」シフトにつき、「特口魂」はお休みです。他にも種々端折ってます。あしからず。

☆Blowersのことですが、小説ばかりじゃありませんか？小説自体悪いとは思いませんが、会誌の70~80%を占めていると思います。小説本なら構いませんが、仮にも会誌となっているのですから、せめて他の企画を作るなりしてそれで50%ぐらいは埋めて欲しいです。（以下省略）  
（神奈川県・蔵田昌弘）

宇垣：穴埋めってことじゃないけど、今の進行状況では他に乘せる場所が作れないのでここに載せました。ゴメンなさい！でご意見のこと、私が代わって答えます。

確かに「会誌」という視点から見ると現状には問題点が多々ありますよね。やるはずだった読者コーナーも営業開始の時点でどこかへ消えてしまったし、PBMもほとんど自滅してしまっただけ。残ったのが今のですけどね。……一応現況をさらけ出しますと、まず菊地が倒れてます。岬が真鶴とASの処理代行で手一杯です。私もこれとASで手一杯、香津美に至っては世界が違うこともあってASの勉強だけで手一杯です。永平寺は山ごもりの支度でこっちどころじゃありません。これプラスそれぞれ学校とバイトのことがあります。頭数はいても能力は限界、というのが実情です。何か建設的な案があったら下さい。精一杯利用させてもらいます。

「Echoで悪いか！」 by 本居こじ

お待たせいたしました。本当に申し訳ありません。別口でやってるPBM“A-Strike”（こっちの方が空技の本線）を休むほどの胃痛を抱えといて、こっちを無理して進めた私がすべて悪いんです。もっと早く他に任せるべきでした。

で、今回は私の片腕、宇垣麻美 嬢が編集・製本をやってくれています。何かと至らぬ点も多々ありましようが、なにとぞ大目に見てやって下さい。私の方もなるべく早く体調を戻すべく、努力を重ねております。……要は気合い入れて本のことを考えずに寝るだけです。

あああ、胃痛がまた……。とりあえず、今はこれで。

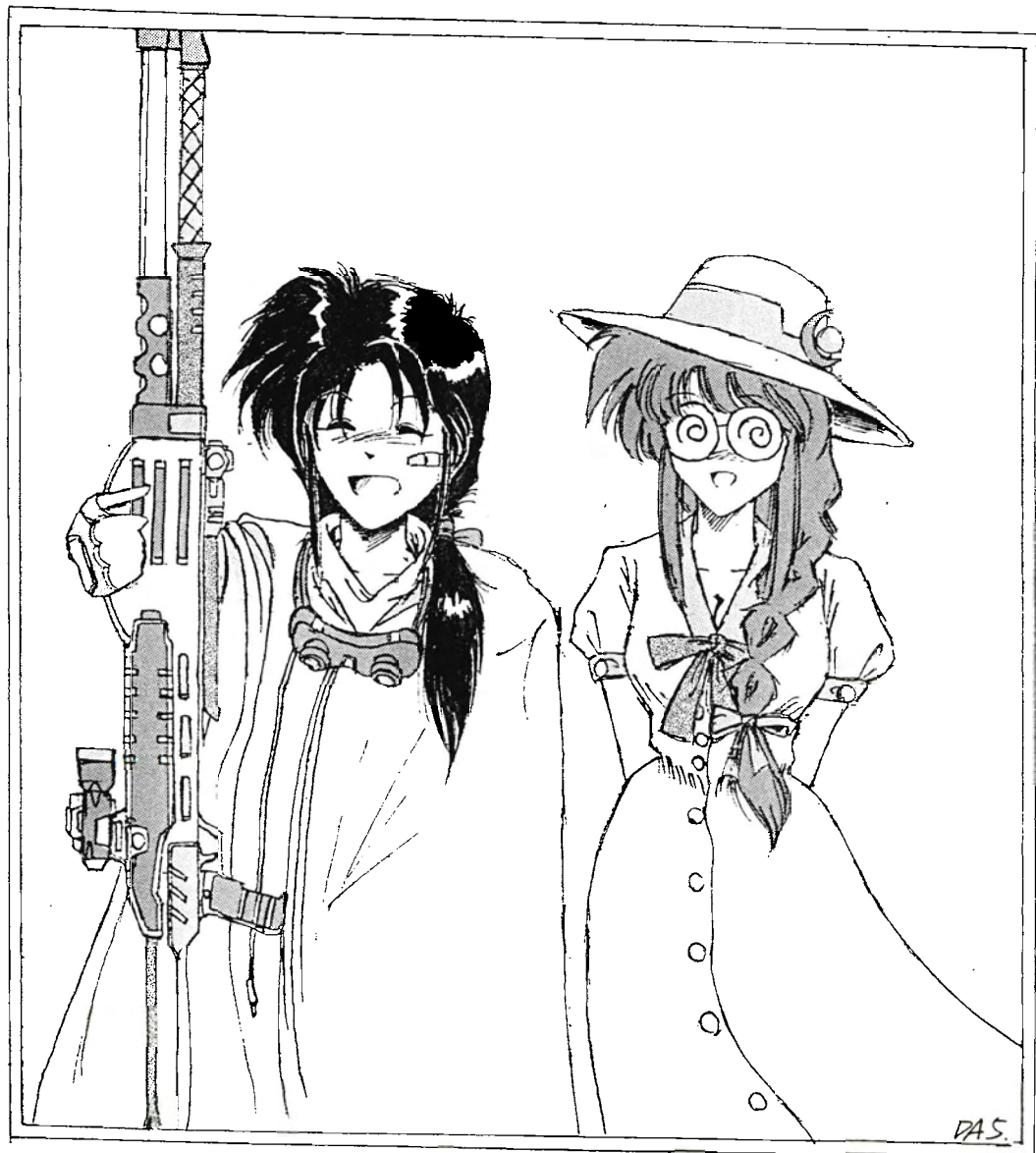
11/9 自宅にて

菊地 研一郎 拝

# PEACE BLESSER MAYA™

STORY 本居こじ & ILLUSTRATION EPST-DARIUS-5

vol. 3



題：コスプレしたお2人。

マヤ：「Xロウリング」(機甲猟兵Xロウリングより)  
違和感がナイ…。(笑)

ヤニヤ：「ココア」(NG騎士ラムネ&40 EXより)  
誰でも出来そうなコッヤ。

☆ いわげごま、アラホー。☆  
相変わらず「自い。」  
トーンが、ないんですよ。  
なげなしやつも使え  
やってみました。  
ごめんごいねえ。  
バコバコ…

(前回までの粗筋)

ICPOの捜査官、尼崎摩耶とヤーニャ・モロフォビッチたちは、地球連邦内のコンピューター・ネット崩壊という危機に直面した。独断で事態解決に乗り出した摩耶は要因と見られるコンピューターウイルスの残片を発見したが、使ったスパコン「スプートニク」までが破壊の危機に直面してしまう。電源コードを抜くことでこの危地を乗り切ったものの、貴重なウイルスのデータは失われてしまったのだ。

5：ヤーニャは医務室のベッドで再び目を覚ました。視線を感じて首を横にすると、摩耶がいる。見慣れた形の透明な壺から同じ色の液体を紙コップに注ぐと、彼女は言った。

「『エクスプローラ』を用意したよ。  
『スプートニク』のチェックやるかい」  
「当然でしょ」  
「じゃ、その前に気付のウォッカ」

紙コップを差し出すと、彼女も濃い緑の小さなぐい飲みに、小さなやかんから酒を満たした。呆れたことに、アルコールランプで燭をつけているのだ。

ヤーニャが一気にコップを空にするのを見て何故か半ば安心しながら、摩耶は「エクスプローラ」を床から取り上げた。黒い本体のそれはA4サイズのラップトップ型で、一見ただのノート・パソコンと変わらない。実際それ単体では何も変わらないのだが、「エクスプローラ」の違うところは背面に追加された通信システムである。ヤーニャ手製のそれは賞状の筒ほどの大きさの直方体で、エクスプローラにはリード線とビスで固定されている。ふたを開けてみれば、気が違いそうなほど細々としたLSIとダイオード、その他電子部品の洪水の隅に、直径数cmのパラボラアンテナが据えられているのがわかっただろう。このパラボラアンテナこそが「エクスプローラ」の命と言っても過言ではなく、これがあることによって初めて普及型のラップトップパソコンの数乗分の働きをこなすことができるのだ。このシステムは

警察用デジタル無線の衛星通信回路を介してスプートニクとリンクしている。軍用並みのスクランブル装置も備えているので、この回線に他から侵入することは、つくったヤーニャ本人でもない限り容易なことではない。

そしていま、彼女がエクスプローラを起動している。現場検証で室内に入れないときには、もっとも有効な処置だろう。液晶ディスプレイにクリル文字が並んでいく。音声装置はエクスプローラにはない。彼女が相当なスピードで処理を進めていくうち、摩耶はいつしか座ったままで寝入ってしまった。

\* \* \*

衛星軌道上の放棄されたステーション———その中でも、作業は進められている。続々入る情報は彼らを満足させるに足るものだった。スコットランドヤードの情報中枢壊滅、月の中央航路局データバンク破壊、国連航空輸送公社の中央指令コンピューター活動停止。なかでも地球連邦軍の汎太陽系防衛システムが彼らにほぼ無傷で転がりこんだのは大収穫だった。コンピューターに対する依存度の高い現在、それはそれぞれだけでも重大な混乱を招くものだった。

「節度ある行動」を連呼するだけの報道は始めから何の役にも立っていなかったが、放送ネットワーク無力化でそれが沈黙状態になるに及び、パニックはテロに豹変した。各所で暴動が発生し、警察と軍はそれに無力だった。

そこへ怪電波が飛び込んできた。暴動が一時的に沈静の兆しを見せた、絶好のタイミングだった。

「私は全能なる神の使徒、ギリアムである。民よ、神の言葉を聞くがよい」

それは街頭の情報端末、テレビ、ラジオ、およそ考えられるかぎりの視聴覚的情報源すべてに現われていた。ヤーニャたちも医務室のスピーカーで耳にすることができた。

「危険です。暗示音声感知されます」

エクスプローラのディスプレイに、ウィンドウ表示で突然メッセージが現われた。スプートニクの音声センサーからの警告である。ヤーニャは反射的にサイドテーブルの花瓶をひったくり、天井のスピーカーへ投げつけた。……もちろん、スピーカーが壊れる由もないが、しかし、それで摩耶が目覚めた。

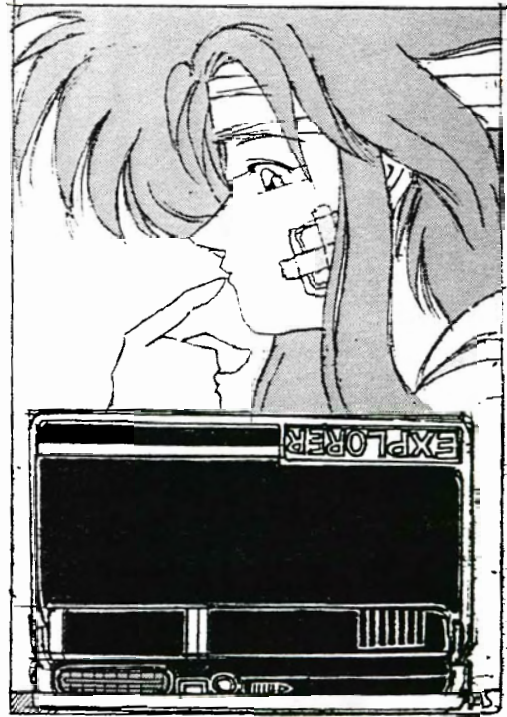
「な……何事？」

「あのスピーカー撃って！早く！」

「??????」

「暗示音声！」寝ボケたままの摩耶に業を煮やしたヤーニャはヒステリックに怒鳴りつけた。「催眠術！」

実は「催眠術」はロシア語になっていたのだから摩耶にはわからなかったが、「暗示音声」で反射的に肩のホルスターから銃を抜き、一発でスピーカーを仕留めた。スタームルガー・ブラックホークの357マキシマム。シャドウ・ハンティング用の強力なやつである。ブローバックもすさまじいが、何よりひどいのはその銃声だ。



「何だ、一体！」

当然医務室付きの医師が血相を変えて飛んでくる。それを銃把で昏倒させると摩耶は外へ文字通り転がり出し、さらに廊下のスピーカーを壊せるだけ壊した。しまいには内股に隠してある予備のチーフスペシャルまで動員し、医務室のあたりのユニットはあらかじめ沈黙させてしまったのだ。

そうなるに黙っていないのはICPOの職員連である。どうしてくれる、情報が入らんじゃないか、と言うのだ。

「ええい、お黙りっ！暗示音声だよ！」

一喝して相手がひるんだ隙に、摩耶は医務室へ取って返した。

「マヤ、大収穫よ。電波の発信源は衛星軌道。……どうも廃コロニーを中継しているようね……その先はどうだかわからないけれど」

ヤーニャは相変わらずエクスプローラに視線を釘づけにしたままである。

「じゃ、手出しできないんでない？」摩耶は首をひねった。「アシはみんな

コンピュータなしじゃ動かないのよ」  
「わかつただけでも前進でしょ」ヤー  
ニヤはこめかみをしきりになで回す。  
「地道な前進の積み重ねが……」  
「わーった、わーったって」  
頭脳労働中にヤーニヤを怒らせると、  
いやになるほど小言が長く続くのだ。

そうこうしているうち、怪放送は中  
断された。簡単なロボットミ―手術の一  
つが終わったのだ。

件の廃……否、事実上地球人類に君  
臨する絶対神の神殿となったコロニー  
の中では、技術者たちが祝杯を上げて  
いた。人類初のコンピューター、「エ  
ニアック」よりもはるかに大型で、そ  
の能力は比較にならないほど高い「ア  
イザック」の前には、白衣姿の「教祖」  
が、同じ姿の研究員を前に見下ろして  
いる。

「人類史上もつとも有能にして賢明な  
諸君……」

「教祖」は努めてゆっくりと、抑え  
た口調で語りかけた。人心掌握術のい  
わば初歩中の初歩である。

「諸君は今まで、無能の木偶にすぎぬ  
政治屋、学会の長老らによって忍従を  
強いられてきた……。ある時は気違い  
呼ばわりされ、またあるときにはあか  
らさまな無視さえも堪え忍ばねばなら  
なかった。

だが、長く苦しかった試練の日々も、  
本日をもって終結する。何をなしたか  
ではなくどの群れに属しているかで全  
てが決定される社会には幕が下ろされ  
た。『アイザック』の判断基準には派  
閥などというファクターは含まれてい  
ない。諸君の努力が正当にむくわれる  
社会の幕開けである。新たなる時代の  
中心となるべき諸君よ、今日は新た  
なる未来を多に祝おうではないか。

『アイザック』よ、永遠なれ！」

「『アイザック』よ、永遠なれ！」

フロアをびっしりと埋めつくすほ  
どの技術者たちが、それに唱和した。

「マヤ、おもしろい情報が出てきたわ」  
医務室のベッドを半ば追い出されて  
地下駐車場においてあった摩耶のトヨ  
タ2000GTレプリカへ移ったヤ  
ーニヤは、「エクスプローラ」から顔  
を上げ、言った。

彼女の傷はICPO全体の規模から  
言えばまだまだ軽い方だったし、収容  
し切れない患者が食堂へ回されるほ  
どの状態になっていたから、仕方がない  
のだ。喫茶コーナーも自動販売機が壊  
れて中身がぶちまけられ、目も当てら  
れぬ惨状だった。

軍は遂に実戦装備で強硬な治安出動  
にのりだした。それほどまでに地上は  
混乱の度を増していたのだ。東京のよ  
うな大都市ならば、なおさらだ。その  
中でここ地下駐車場だけは、場違いな  
ほど静寂を保っていた。

「標準語に直すから、ちょっと見て」

助手席に陣取っていたヤーニヤは、  
開け放しのドアのピラーの間から、ボ  
ンネットの上に横向きに座っている摩  
耶に手渡した。そこまで行くと、シガ  
レットライターにつないである電源コ  
ードは長さ一杯である。

「なーによ、これ」一瞥するなり摩耶  
は言った。ヤーニヤにしてみれば当然  
予想された反応だったから、何も言わ  
ない。「運輸公社の事故記録じゃない  
の。それも断片ばかり」

「現場が例の中継コロニーのすぐそば。  
被害を受けた機体はハシケなんだけど  
……付近にハシケがいるようなものは  
何もなかったようなのよ。そして、そ  
の出発もとは中継コロニー」

「……何しに行ってたんだろ」

「ね、変でしょ」

重要にしてほとんど唯一と言ってい  
い糸口を手に入れたことに、彼女たち  
はまだ、気がついていない。(続)

# Damyan = Kizaki's Road of The Messiah

Road No.1 "What a fuck' in place here is!!"

Written by Damyan = Kizaki

はじめに

今夜は遠いところよく来てくれたな。まあ座れや。俺の名は鬼崎蛇弥闇（きざき・だみあん）。エホヴァを見捨てた神父だ。せっかく俺の30歳の誕生日に来てくれたんだ、退屈しないように、1つ面白い話をしよう。俺が5年前、波津野つつ一街で実際に体験した奇妙な出来事のことだ。ウソじゃないぞ。今でも俺の誕生日を祝ってくれる我が愛する妹・波出子（はです）と聖剣の名にかけて、これから話すことは全て事実だ。ま、固い話は抜きにして、ワインでも飲もうや。106年モノだぞ!?こいつを相棒に、朝まで俺と語り合おうじゃないか。3年後のこと（註1）なんか忘れてさ。では、俺が“大異変”の救世主となるべく、受けた最初の試練の話を始めるとしよう。ワインを注いでと……そんな、20世紀最後の“獣の日”（註2）の夜に、乾杯……!

1996年6月6日

横浜の某古屋敷にて

Prologue

9月13日金曜日。あれから、もう一週間もたつのか。俺の目には、いまだ砂の大海しか映らない。相も変わらず、プルトニウムを燃料にしてるファイヤーボールは、俺たちをバーベキューにしようとして今日もはり切っている。流れる雲など見えるはずがなく、サソリも暑すぎるのか出て来ない。そういえば、あのクソいまいましい火の球にグロッキーにされた連中が、昨日よりもまた増えてるみたいだ。あのアンドロイド野郎は、そういった連中に熱さましを配っているが……おいコラ、そんなことするよりも、他にもっといい方法があるんじゃないか!?そういった奴らに水やりや、それでいいんじゃないか。なのに奴は、一度飲ますときりがないとぬかして、ほとんど水を分けてくれない。ああ、確かにその通り、もしここにオアシスでもありゃあ、俺達はその水を全部飲みほしちまうだろうよ。たとえその水が、こきたねえドロ水だったとしても。けどよ、こんな所に俺達を連れてきやがったのは、元を正せばためえじゃねえか。飲ませるときりがないと?ふざきるのもいい加減にしろ!畜生、ざけんじゃねえぞコラ!こんなとこに放っばいといて、後からのこのこ現われやがって、ついてこいだと!?ヤロー、人間じゃねえからって、いい気になるのはもうよしたらどうだ!そんなたわ言ぬかしてるヒマがあつたら、早いとこ俺達をここから出せってんだ!この“地獄”から、“殺人サウナ”から、“World of Xeus”から……。

I

今日の夜も寒い。このどこまでも続く砂の大海原の上を、今夜も氷の死神がケタケタ笑いながら飛びまわっている。そして奴らの下僕とも言うべきサソリやムカデどもが、俺達をその毒牙にかけようと、またもや俺達のポロテントの中に忍び込んでくる。しかし、俺はそんなことより、寒いだのサソリが出ただのギャーギャーわめき散らすアーパー女の黄色い叫び声の方を先になんとかしてもらいてえもんだ。おかげで、また明日歩くために寝なけりゃならねえのに、ちっとも寝れやしねえ。昔だったら、ヤクかアンパンで気をまぎらすんだが、アンパンやってくたばっちゃまった俺の仲間の姿を見てからというもの、そいつに手を出したことは今日までない。しかし、あのアンドロイド野郎め、ちっとはマシな毛布出せってんだよ。そんなもって風が刃りかまわず入り込んでくるこのポロテント。て

めえの上役は高い文明持ってんだろ？そんだったら電気毛布か、さもなくばシュラフぐれえくれたっていいじゃねえか。こんなんじゃ俺達は奴隷と同じだぜ。…いや、そうかもしれなえ。俺達を奴隷としてあいつの言う“町”に連れてつてる…ありえる話だ。けど、今はそんなこと考えてる時じゃねえ。早いとこ寝なければ…しかしなー、今夜ぐらいは“あの日”の夢を見ず、死んだように寝たいもんだ。どういうわけか、ここんとこ毎日のように、その夢を見る。そう、俺達がこのクソいまましい世界に投げ込まれた、あの呪われたいまわしき日の夢を…。

## II

…あれは、9月6日の深夜のことだった。俺は何人かとつるんで最終バスに乗り、南町にあるディスコ“Xeus”に行った。だが、そもそも俺はディスコ何かに行くつもりは毛頭なかった。本当は7月の説明会で聞いた、山中で建設中の第2市庁舎を探しあて、そこにガサ入れするつもりだったのだが、あのクソ暑いさなかで、俺の頭は少々ボケてしまったらしく、山中ではなく町中を探していた。当然見つかるはずがなく、俺は他の見つけれなかった連中とつるんで、暑さをさけるためにサ店になだれ込んだ。そこでムダ話をしていた時、連中の一人の“大きな建物を建設するには多大な電力が必要だが、それを極秘でやってるんだってんなら、どこかたくさん電気使っても怪しまれないところに、発電機かなんかがあるはずだ。その場所は、まあ、ゲーセンとかディスコとか…”というセリフを聞いた俺達は、数十分後、そのパルテノン神殿を型どったシブい建物の前にいた。“Xeus”の前に。第2庁舎に関係がありそうな要因は、立入禁止の地下室があるぐらいだったが、他にもDJのナーシム＝追難（ついな）は人間ではないらしいとか、床にやたら砂が散らばってたり、VIPルームにはサソリやムカデが何匹かはってたり、DJルームのパソコンのメーカーが見たこともないもの（後日それはイギリスの大手家具メーカーのものであるとわかった）だったり、興味を引くにはそれだけで十分だった。俺はその時、第2庁舎への興味から、“Xeus”への興味に乗りかえていた。今考えてみると、あの時の俺が一番軽率だったと、今さらながらくやししく思われる。

そして、運命のあの夜、俺は建物裏の壁を爆破して、そこから地下室へ行ってみようと計画をたて、そのテの専門家や腕に自身のある奴らを集めて、そいつらと最終バスに乗った。そして今まさに日付が変わらんとする時、壁にほとんど音もなく穴をあけ、なだれ込んだ。そこまではよかった。その目の前にあった配電盤を、よせばいいのに連中の中の一人、東雲とかいう野郎がそいつをいじくり、タイミング悪く裏手の方に夜の空気を吸いにきたらしいDJのナーシムに、あたりまえのことながら声をかけられた。その時の手元の狂いがもとで配電盤が漏電を起こし、基盤がスパークした。次の瞬間、突然俺の上にすさまじいGがかかり、耐える間もなく俺は床にたたきつけられた。そこから、さらにGがかかり続け、俺は重圧に耐えられなくなり、意識が遠のいていくのが感じられた。その時、俺はナーシムの声を聞いた。

「大丈夫、行先は固定してある」

俺の中の何かが、プツンと切れた。

## III

俺は焼けるような暑さで目をさました。見ると、俺と一緒にだった連中（知らねえ顔もいるが…後で聞いてみたら、外の空気を吸いに来た“Xeus”の客だそうだが）がそこらにブツ倒れている。そして異様なのは、360度どこを見渡しても焼けた砂、砂、砂。オアシスどころか木の一本も見えねえ。見上げてみれば、雲一つない青すぎる空、燃え盛る巨大な火の玉。“砂漠”という言葉が、俺の頭の中に浮かんできた。しかし、一体どこの砂漠なんだ？その俺の問いに、旅行好きだという葉山っていう女が、絶望的な口調で答えた。

「こ、ここ、オーストラリア、じゃないの…」

オーストラリアか。やれやれ、思えば遠くへ来たもんだ。俺はふと、腕時計のカレンダーを見た。ダイバーウォッチなので、強化ガラスを使ってるはずなのに、あのGのおかげ



でヒビが入りまくっている。カレンダーにはこう記してあった。“9月6日”時刻は“午前6時6分”ん？どういうことだ？俺がGに押しつぶされたのは、確か日付が変わる直前だったはずだ。それなのに、時計はそのさらに18時間前を指し示している。SF風言えば、時空の狭間を通りぬけてきた時に、時間が狂った、とも考えられるかもしれない。しかし、何回か時元回廊を通ってきたペンタスの隊員たちや時空罹災者たちの時間が狂ったという記録はないはずだ。（ペンタスの内に、俺のダチや知り合いが何人かいるから、そういう情報はすぐ入ってくるはずだ）まあ、確かめた奴がないだけかもしれないが。まあ深く考えても今は答えが出るはずがない。すさまじい重圧で時計の中身が少々いかれたということでも済ませておくか。今はそんなくだらねえことを考えているヒマはない。もっとすさまじく重要な問題がある。砂漠では、水がないと二日で死ぬと言われていたらしい。水は、砂漠で旅するに当たって、何よりも大切に、絶対大量に持っていかねばならないはずだ。あたりまえと言っちゃえばそれまでだが、そんな必要のない所から突然飛ばされてきた俺達は、誰も水なんか持ってきちゃいないのだ。まったく、最悪のシナリオじゃねえか。しゃーねえ、一日歩いてオアシスでも探すか。と立ち上がってみると、その事実を理解した他の野郎どもは絶望し切って、そこにうなだれている。俺はたまたま奴らにどなり散らした。

「この根性なしが！こういうときこそ、状況を打開すべく行動しなきゃいけねえ時じゃねえのか!?オラ、てめえらそこでひからびて死にてえのか!!」

俺はどならずにいられなかった。ふがないあの連中を立ち上がらせるためにも、そしてまた、連中と同じ行動をとってしまいそうな俺を引き止めるために。そんな時、俺は背後から突然声をかけられた。一回聞いたなら、忘れられない声だった。

「そう、その通り。こういう時こそ、誰かが先頭に立ち、行動しなければならぬ。まあ例外もあるがな」

ナーシム＝追難だ。アラビア風の服装にマントをはおり、すっぽりフードをかぶっている。ラクダに乗っていたそいつは、俺達に何枚か革袋を投げてよこした。中には、きれいな水がたっぷり入っていた。本能的に水をノドに流し込む。周りを見ると、案の定、数枚の水袋をめぐる連中がまるで動物のナワバリ争いのようにドタバタやってる。その中で一人だけ水を飲もうとせず、奴に向かって歩いていく男がいた。その、服装からして六本木か銀座あたりをうろついていたようなナンパ野郎の男、西風は言った。

「たとえ、君がアンドロイドだろうと異星人だろうと異世界からの侵入者だろうと、僕は君を……」

そこまで言うと、ナーシムは突然奴に言い放った。

「全部正解だ。君はカンがいい」

何!?こいつ、やっぱり人間じゃなかったのか！もしこいつが本当に作りもののロボットだったら、作ったのはこの世界の住人か？それなら、ここから戻る方法を知っている、いや、持っているはずだ！俺は、いつのまにかこう叫びながら持ってきていた（何か出てきたらと思って持って来てみりゃ、こんなところで役に立つとは思わなんだ）俺の自慢の聖剣“ダークブレイカー”（註：木刀（笑））をひつつかみ、奴に向けてダッシュしていた。

「こんのドラえもん野郎!!（笑）よくも俺達をこんなヘンピな所に招待してくれたな！オラ、さっさと元の所へ俺達を戻しやがれ!!」

機械なら、外見は女でも手加減する必要がねえ、と判断した俺は一気に間合いをつめ、俺が並いる族との抗争の中で会得した必殺技を奴に向けて放った。サッカーのオーバーヘッドキックを参考に、軸足の空中回転を速く、蹴る足に全体重をかけて敵に襲いかかり、夏の湿気でダメになった塩のようにしてしまう（意味不明）、名付けて“夏塩蹴”（かえんしゅう）（笑）。しかし、俺の右足は奴の胸板にたたきつけられる前に、片手で軽く受けとめられ、そのまま後ろにぶん投げてしまった。なんてこった……今まで何十人をも病院送りしてきた俺の蹴りがぜんぜん効かないとは、この野郎、アンドロイドと言うだけあって、ムチャクチャ強え……落下している時、俺は確かに奴の言う言葉を聞いた。アンドロイドの無機質な冷たい声を。

「私は君達の味方だ。一緒に街へ行こう。マディ氏も待っている」  
次の瞬間、俺は頭に強烈な衝撃が走るのを感じ、それっきり何も感じなくなった。

#### IV

俺のクソいまいましい夢は、丁度そこでいつも目がさめる。全く、いつ見ても胸クソの悪くなる夢だぜ。とにかく、また夜が去り、朝がやって来た。俺の狂った時計で言えば、9月14日土曜日、午前8時4分。他の連中はほとんど起き、ナーシムから配られた固形食料（一食で一日分の栄養がとれると言ってるが……この味だけは、くさったチーズトンカツソースかけて食ってるみたいな味だけは何とかしてくれ〜）を鼻つまみながら食っている。俺はその“Xeus”版カロ○ーメイトは食わず、ナーシムが“出発する”と言うまで外の砂以外何も無い荒野を見つめていた。その時、久しぶりにサソリやトカゲ以外の動物を見かけた。ワシか、タカかな。彼の力強い鳴声を聞いていると、行くところまで行ってやろうという気持ちがわいてきて、少し元気になった。ありがとよ。せいぜい気をつけて生きろよ——俺は空を優雅に飛びまわる王者に向かって、親指をつき立てた。Good-Luck。

9時すぎに俺達はテントをたたみ、また歩き始めた。今日も太陽がまぶしい。いつになったら奴は精根つき果てるのだろうか。砂漠の砂を巻き上げる風は、目と鼻、口に苦しく、たちまち体中を砂だらけにしてしまう。サソリどもは、いつ俺達に襲いかかろうかと考えをめぐらすかのように、俺達をつけてくる。こんな日々がいつまで続くのだろうか。いつになったら“町”に着くのだろうか。奴はメカだから、多分感覚はないだろうから、俺たちの苦労なんざわかりやしねえだろーがな。ナーシムと言えば、数日前に波津野にいた時からナーシムのことを調べていたという西風から、こんなことを聞いた。

ナーシム＝追難は二人いるらしい。一人は今、目の前でラクダに乗ってるくそつたれ野郎。説明なんざいらねえ。そしてもう一人は、どうやら人間らしい。奴とは全く正反対で、温厚で明るく、おしゃべりと音楽が好きないい女だそう。昼は市役所で翻訳要員として働き（英検1級だと。ご立派）、夜は“Xeus”のチーフDJとしてやってる彼女は、何日かに一回、あのナーシムと入れ代わっているようだ。交代制なのか？なせ入れ代わる必要がある？すべての答えは“町”に着いたとき、わかるはずだ。多分、本物は人間の方だろうが、機械の方があれを洗脳しているということもありえないでもないし……アンドロイド＝ナーシムについて、俺はおもしろい話を一つ聞いた。奴がDJやってる時、彼女のファンだという酔狂な奴が、チーク踊ってくれと言ったそう。奴は、ろくに句読点もつけずに、一気にこう言ったという。

「要するに君が意図し、私が察知しなければならないのは君は私に求愛行動をしているのであり私はそれに関する反応を示さねばならないのだろう。残念ながら答えはNOだ。私は君とはSEXできない。あきらめて欲しい」

それを聞いたとき、俺は久しぶりに大笑いし、周りに白い目で見られてしまった。ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ、こりや傑作だわ。君とはSEXできねえだあ？まあ、言いえてミョーだな。何せ機械だから、入れられても感じないし、イカないし、あつ、それよりも下の口がねえか、あはははははは……まあ、事務的な機械のなせる失敗だが、こいつあ笑える。今度ウサばらしにからかってやるか。

それと、ぶん投げられた時にナーシムが言った“マディ氏”のことだが、さすがはナンパ野郎、しっかり調べていた。本名はマディ＝ラングといい、“Xeus”のオーナーだそう。ヒゲをたくわえた、ガッシリしたイギリス人中年オヤジである、というのが表の顔。裏の顔は……まあ、多分ナーシムよりは階級は上だろう。もしかしたら、奴こそが“異星人”なのかもしれない。とにかく、“町”に着いたら、奴はマークしとかにゃならん。そうこう思ってるうちに、ナーシムが手を上げた。やれやれ、また砂嵐かよ。もーいい加減にしろってんだ！俺は、俺らしくもなくグチをブツブツ言いながら焼けた砂の上に身を横たえた。その時、上の方でゴオオツという音がした。砂嵐のものではない。何だ？俺はグラサンをしっかりと押さえて、チラッと上を見た。すぐに砂が目に入り込んできたの

で、ほとんど見れなかったが、俺はハッキリ見た。銀色の、翼のないジェット機のような飛行物体を。

## V

今日もまた、ぶん投げられて落ちるとこで目が覚めた。何でこの夢ばっか見るんだろう。それだけ、あの時の印象が強かった、ということだろうか……。

2時間後、俺は西風と砂漠を歩いていた。今日はダウンした女（ボディコンスーツ着てる女子大生か……“Xeus”の客だろう）をおぶっているの、いくらか足が重い。西風は、そんな俺をうらやましそうに見ながら、俺に言った。

「そうそう、鬼崎さん。“Xeus”の常連の一人に、あの独裁市長のアーパー娘、石黒嶺子がいるんすけど、マディに探りを入れてみたら、あのオヤジ、嶺子に何かしつこく聞いてるんすよ。何げなく近づいてみたら、家族がどうの、父親がどうの、とかほざいてましたけど」

マディの奴、俺達の次には市長一家を狙ってるらしいな。こいつあ、ますますマークを強める必要があるな。でも、あいつは波津野じゃ敵が多いから、いなくなったら喜ぶ奴がたくさんいるだろーな。ま、こっちに来てもらっちゃえれえ迷惑だが。けど、いつも嶺子が連れて来てるってゆー、山根みやこ嬢も飛ばされて来りゃ、少しは周りも活気が出てくるだろ。そうなりゃこっちのモンなんだが……。

と、その時、上空で砂嵐の時聞いた爆音が聞こえてきた。すぐに上を見上げる。やっぱりそうだ。銀のボディ、翼のない飛行機。それにしても、このパラパラ降ってくる灰みたいなのは何だ？ん？あつ、こいつあ、石炭屑じゃねえか！そういえば、かすかにポンポン言う音もする。じ、じゃあありゃ、蒸気機関で飛んでるのか!?一体全体どうなってんだこは。未来と昔がごっちゃになった、何とも妙な世界。俺は足を早めた。

一時間ぐらい歩くと、突然ナーシムがラクダを止め、ふり返ってこう言った。

「みんな、ここまでの旅路ご苦労だった。“町”まであと数キロたらずだ。着いたら、ホテルに部屋と食事を用意してあるから、ゆつくり休んでくれ。あ、そうそう、食事は君達に合わせてあるつもりだ。スシというものを用意してある」

次の瞬間、今まで歩いてきた者も、グツタリしてた奴も、最後の力をふりしぼって走り始めた。そりゃあたりめえだ。とうとう町に近づいた上、着いたらちゃんとしたメシが食えるのだ。しかも寿司だとよ！こいつあだまっちゃいらねえ、俺はいく分元気になった女をそのままおぶりながら、全速力で走っていた。うお～、早く俺に寿司を食わせろ～!!

そして、ついに走ることも数十分、俺達は高いカベに囲まれた、敷地にある大きな鉄の門の前に立っていた。みな抱き合い、どつき合い、笑いこげ、言葉では表現しがたい喜びを精一杯体で表していた。おぶっていた女も、西風も、ハマやかした東雲も、中に混じっている。生きててよかった、という言葉が頭の中をよぎった。そうだ、どんなにボロボロになっても、つらく苦しいことがあっても、生きてさえすりゃいつか絶対むくわれるもんなんだ。救われない奴なんざいやしねえんだ！俺は、ダチが死んで以来久しぶりに涙を流し、一度は裏切った“神”に感謝し、そして力の限り叫んだ。

「Thanks my God!! Bottoms up, for our “Life”!!!」（ありがとよ神様、俺達の“生命”に乾杯）

この呪われたくそつたれな地“World of Xeus”に飛ばされてから17日後、9月23日月曜日、秋分の日の午後3時37分のことだった。

## VI

俺達は、門が開いたと同時に飛び出してきた、NOKのシャーロック＝ホームズに出てくるようなカッコした警官らしき男達に保護され、町に入った。入口付近の家は泥を塗り固めたような、アフリカ付近の国（エジプトとかサウジとか）風の造りで、女はみな黒衣にショール。イスラム系民族か。めずらしがってついてくる6歳ぐらいのガキが、妙にいとしかった。こんな気持ちは初めてだな……中には得意の手品を通行人に披露し、さっそ

く銭かせぎしてる女もいた。その女、葉山すみれにコインを一枚見せてもらった。それはイギリスで使ってるペニー貨幣だった。

俺達はそのを抜け、石畳の通路に出た。まず目に入ったのは、なんとイギリスはロンドンにあるはずのビッグベン！どしてこんな、北半球とは縁のない砂漠のド真中にロンドンっ子のシンボルが!?しかも、今通ってるのは“第2ペーカー街”だと。ちゃんと“シャーロック＝ホームズ2世宅”までありやがる。まるで、ロンドンをそっくりそのまま持って来たようなもんじゃねえか!?その時、本当にホームズに出て来そうなカッコの男が、“Welcome! The foolish people~”とふざけてきやがった。俺は奴に向けて、中指一本つき立ててやったが、奴はそしらぬ顔。分かんねえのか?俺は試しにできるだけいいいなイギリス英語で聞いてみた。

「今は何年でしょうか？」

「バカ言っちゃいけないよお兄さん。1889年2月19日じゃない、あほらし」

…え、ウソだろ!?俺達はタイムスリップしたってのか!?だとしたら、一体ここは、どこだ?こんな所、一般の史実には全くないが…そうこう言ってるうちに、俺達は見るからに高そうなホテルの前に着いた。“ホテルXeus”。ロビーには支配人らしき白人がいて、俺達に部屋のカギを配っていた。そして言っていた。

「ようこそ、大英帝国租借地Xeusへ!どうぞごゆっくり!」

うまい日本語だ。にしても、大英帝国租借地だと?これでイギリスがからんでいることはハッキリした。しかし、なぜ大英帝国が、こんなオーストラリアの砂漠に第2のロンドンをつくったのか、なぜ1889年なのか、分かったことはほとんどなかった。気がつく、俺は部屋の前に着いていた。番号は666、獣の数字か。俺にピッタリだ。

中はなんとロイヤルスイート!しかも居間のテーブルには、にぎり寿司やいなり、刺身のオンパレード!

「うおお~、寿司だ、米だ、日本料理だあ~」

俺はそれを5分で胃袋の中にブチ込んだ。それから、俺は醤油だらけの皿をそこに捨ておき、寝室へ向かった。そして、そのドアをあけたと同時に、全身の力が抜け落ち、ドアノブを握ったままそこにブツ倒れ、そのまま寝てしまった。

## Epilogue

気がつく、俺はもう一步の所でたどりつけなかったでかいダブルベッドで横たわっていた。そういえば、俺が着てたスーツとマントは、新しいものに新調されて部屋の隅にたたんで置いてある。(俺としては、長旅でボロボロになってたマントの方が、カッコつけてよかったんだがな)俺自身は…ゲッ、何もつけてねえ!おいおい、冗談はよしてくれよ。一体誰が俺の服ぬがせたんだ?女のメイドだったらいいけど、ヤロウだったら…ウップ、考えたくもないね。下着は服のとなりに置いてあったので、急いで体につける。(ブリーフか、チッ、トランクスの方がいいのに)それから服を着ようとすると、ベッドのスタンドの所に紙きれが置いてあるのに気づいた。見ると、あのマディ＝ラングの署名のついた手紙だった。(そのかわりコピーらしい。こっちにはコピーもあるのか)さっそく読む。

親愛なる100年後の日本の諸君

まず、不慮の事故に巻き込んでしまったことを深くお詫びしたい。早速だが、この世界についての背景を説明しよう。我々は1885年、突然外宇宙から“銀の船”に乗ってやって来た異星人に侵略され、防戦むなしく我らが地球は占領されてしまった。ここ大英帝国租借地Xeusは、奴らの地球での居住地であるのだ。奴らは私値には無関心のように、度々来ては、奴らの科学力を見せつけに来る。それらを利用して、作ったのが飛行車両、大計算機(オルディナートル)他だ。大計算機を使って君達の転位場所を突き止め、ナーシムを派遣したのだが、彼女がとんだ失礼をしたようだ。ここで深くおわび申し上げる。彼女は到着後すぐに調整したので、もうあんな失礼はしないはずだ。それと、君達は元の世界へ帰すことはできるが、空間変位機の蒸気の調子を見なければならぬので、もう少

し時間がかかる。そこの所は承知してもらいたい。君達の部屋は、ここを去るまで使ってもらってかまわない。

ところで、明日の2月22日の夜、イギリス貿易商館で、南極大陸に勇敢にも上陸を果たした白瀬轟（しらせ・のぶ）大尉の御来訪を記念してパーティーをとり行うが、君達も詳細を説明するという形で招待しよう。各部屋にタキシードかドレスが置いてあるはず。その日の午後6時にホテルのロビーに集まるように。

最後に言おう。私たち、すなわちここに住む“人間”は、君達の味方だ。

マディ=ラング

なるほど、ベッドの下に黒いタキシードが置いてある。時計を見ると、2月22日午後5時30分。ゲッ、あと30分しかねえっ！俺は三日間も、疲れていたせいもあるが寝込んでしまったことを後悔しながら、急いでタキシードを着た。ジェルはないか、ジェル？あるわけねえか。顔を洗うついでに髪をぬらし、ブラシを入れる。蝶ネクタイもしめ、グラサンをかけ、マールボロをくわえ、万が一のために聖剣ダークブレイカーを背中にしよい込み、その上から新しいマントをはおる。よし、これで準備OK！と、時計を見ると5時55分。ゲッ、おいてかれちゃう！俺はドアを蹴り開け、下の階への階段をダッシュでかけ下った。

俺はロビーに向かう廊下を走りながら、砂漠のきつい旅で身も心もボロボロになった俺が、ここまで回復したことに安心し、ディスコ“Xeus”に行った時と同じ、“何でも来やがれ”の心意気が甦りつつあることに満足した。へっ、アンドロイドだろうがエイリアンだろうが、悪い奴は相棒のサビにしてくれるぜ！来るなら来いってんだ。

そのうち、正装した連中がほとんど集まっているロビーが見えて来た。奴ら、“やっと来たぞあのバカ”とか、“何やってんのあいつ”とかほざいているが、勝手にしろ。今の俺は何も恐くないんだからな。俺は奴らを尻目に、入口で待っていた4頭立て大型馬車に乗り込んだ。あとから、グチをたれながら他の連中が乗り始め、馬車は道を走り始めた。その時、俺はこの道を勝利への道だと思っていたが、それから数時間後、これは未来の救世主への新たなる大きい試練への道であったことを、心から痛感することに、俺は知るよしもなかった。

BGM-Weekend~紅~Joker [by X]

To be continued...

少し余ったのでご挨拶

チュース、ネットゲーム1年生、鹿島久義です。今月から、俺の弟分、鬼崎蛇弥闇を中心に、毎月の彼の行動を勝手に書かせてもらってます。まあこんなものを公に出すのは初めてなもので、読んで不快になった人もいるかとは思いますが、どうか、しばらく大目に見てやってもらえます？あ、文句があつたら、どうかお知らせ下さいな。だんだん良くしていくつもりです。それでは、他に大して書くこともありませんし、このへんでペンを置きたいと思います。（俺はワープロなんざ持つとらん！）ワープロも時間もない（俺は来週中間試験だったりする）のに夜中Xを聞きながらシコシコ書いてるような俺でよかつたら、どうか今後ともよろしく。それでは、すべての編集者と読者の方々の上に、神の祝福があらんことを。……

10月17日午前2時10分

鹿島久義

自宅のブタ小屋にて

註1：ノストラダムスの「例の予言」です。

註2：「ヨハネの黙示録」または「オーメン」参照

★ワープロ代行、罫から

……とりあえずこの話は、古参ネットの閉塞性が強すぎることで有名な遊○体の「那由多の果てに」をベースにした日記タッチの「情報」です。「誰が一番無茶やるか 古参が目立ちすぎるぞコノヤロー・ゲーム」というのが会長の評価だそうです。まだやってなくて興味の出た人は、中途参加でもしてみたいかがでしょう。まだできるはずです。



告 知

之～。次号から、小説とゲームレビューを交互にやってゆく予定です。  
小説は 半分 まんが が 混ざったもので、上のイラストにあるような、ファンタジー系かスタークルサーの  
サバドストーリーのような内容と予定です。ゲームレビューは、PHALANXとサレントXビズを最初に  
取り扱う予定です。おおいに変更の可能性があり得。次号を見て11月をたてないに。  
担当： EPST-DARZUS-5

# 真鶴レポート

9月30日、達磨忌が催された。朝の1時間目を潰して講堂に集合して、お経を唱えて校長の話を聞くだけ。何もしなければそのあと2時間目まで、30分ほどは空き時間ができるのだ。1年生も先輩や内部生たちからそのことは聞いていたのだろう、誰一人目立った行動には出なかった。ただ、読経の最中に「ゴスペル現象」で気分を悪くして引っくり返ったり、宗教上の理由からか読経せずに黙っているものもいたが……。圧巻だったのは宇垣の「立ち往生」だろう。立ったまま寝るのだ。影の名物と化していたこの行動、このお陰で初雁が同じことをやっても誰にも気付かれなかった。また、この時男子部では影山が急に腹痛を起こして退場していた。こちらの方は、「まあわざとだろ」ということで、大した話題にはならなかった。生徒会の作戦方針のこともあったから、先生連も特に何も言わなかった。どうも暖簾に腕押し的な脱力感を覚える影山では、あった。

「ハイ整列ーっ！」

小田原から名古屋まで、わずかばかりの時間を新幹線でやってきた真鶴の生徒たちは、中央コンコースで一旦点呼を受けた。

「何でこんなコーリツ悪いことすんのかしら。米原出た方が速いし、疲れなくて済むのに」「でも米原は狭いわよ」

「うーん、そっかー」

初雁つばめと伊藤早苗の会話である。ダイヤの鬼・初雁にも盲点はあるのだった。

「でも私バスの方は弱いよねー。すぐ疲れちゃう。……アレ？」

突然初雁はギョッとなった。点呼を取り終えて報告していた担任、新見（男・50歳）の背後で、彼の荷物を酔っ払い風の男が持って行ってしまったのだ。

「先生、荷物！」

伊藤が大声を上げると、盗人は一目散に逃げ出した。

「ここにいなさい！」

そう言い残して新見と体育科の先生が後を追う。

30分後、先生たちは帰って来た。荷物は戻らなかった。

今回最初の脱落者は、女子部1Aの、担任だった。代任には、まるでやくざの親分のようにどっしりした印象の体育科主任、鹿間（男・46歳）が入った。

「お山では起きて半畳、寝て一畳」

これは世に伝わる禅寺での生活の厳しさを語る言葉である。つまり修業中は、起きている間は禅を組むのに最低限必要な半畳分だけの面積しか与えられず、寝る時は布団一枚分、即ち一畳分しかないということである。

「それしかねえ！」

これが続くと、真鶴の生徒が永平寺の広間で雲水（修業僧）から叩きつけられる初めの一言となる。広間に整列させられた生徒たちは、ギョロリとにらみ回しながら列の間を見て回る雲水に、この他いろいろと訓示を受ける。

「お山では、常に雲水たちが厳しい修業にはげんでいる。ここまで来た以上、諸君たちにも短い間ではあるが我々の掟に従ってもらおう。……」

ピーンと張り詰めた空気の中で、次々と注意が与えられる。余裕の表情なのは何べんも来ていて慣れっこになっている引率教員だけだ。

「これはエライ所へ来てしまった」

誰もが程度の差こそあれそう思っていた。

訓示が終わるといきなり坐禅である。45分間。既に宗教の時間で坐り方は習っていたが、有名な絵天井の間で明かりを消され、しかも「本職」の雲水たちに警策を持って回られると、胃への負担はかなりのものになる。……そして連策が始まった。端っこから順に一人残らず肩を叩かれるのだ。悲鳴を上げたくても、上げられる状況ではない。

ようやくそれが終わると、当然のごとく溜息の嵐である。だが雲水は無情だった。

「喋べるなア！」

一喝され、押し黙る生徒たち。続く夕食も、作法と早さをうるさく注意されては、腹の足しにもなりはしない。再び禅をくみ、床を用意したのは8時半のことである。

「どうせ怒鳴り散らされるんなら、いいや」とでもいうのか、風呂に入るものはわずかであった。……9時開枕。

「じょおーっだんじゃないわよね、こんなキツイの」

「ホント。息がつかっちゃう」

「誰だ、まだ起きてんのは！」

布団に入って愚痴をたれていた初雁つばめと坂井法子は、この晩最初の犠牲者となってしまった。寝なかつた罰として、大広間でみなの特同の視線を背中に受けながら、一時間再び坐禅を組まされたのだ。見回りの雲水もご苦労と言えはご苦労なことである。

理数科ではこれにもう一つ困ったことが付け足された。……そう、沖田の白衣である。それ自体で化学兵器の用をなすのではないかと思えるほど強烈な臭気を発する白衣は、永平寺のときにも御目見えしていたのだ。ご丁寧なことに、寺の中まで着て入った。

そこで水産科の女子生徒が実力行使に訴えた。寝ている間に白衣を奪ってしまったのだ。持ち歩くには困るので、(そりゃあの激臭である)朝解放されてからすぐ、永平寺下のドライブインのゴミ箱に突っ込んでしまった。

その日から水産科のものが理数科のヒーローになったのは、言うまでもない。

永平寺が済むと、金沢観光となる。二日目の自主行動が楽しい……はずだったが、どうも勝譲二にとってはそうも行かなかつたらしい。要は影山になにがしかチョンボしてくるよう強要されたのだ。しかし勝はここで頭を使い、こっそりレジで金を払って何食わぬ顔で出てきたのであった。勝に一本。



初雁は二日かけて兼六園を見て回った。伊藤からどっか別のところへ行かないかと誘いがあったのだが、ことわった。理由はこうだ。

「やっぱ来たからにはねー、落ち着いてじっくり見ときたいから」

二日もかけて「落ち着いてじっくり」見ていたのが、実は広場の銅像だけだったということは、初雁自身以外は誰も知らない。

その伊藤早苗は何をしたかったかと言うと、「ちょっとそこらでショッピング」がやりたかったわけである。坂井法子と、地元出身の同級生 加越京子が一緒だった。ちょっと変わったところもあるが、その辺は普通の女子高生と変わらない伊藤である。一番ありがちなパターンかも知れない。

彼らは昼に街の少し外れの方へでて、ある餃子専門店に入った。……が、入ってみると前評判の割には真鶴の生徒の姿がない。不思議に思いながらも入ってみたら、理由はすぐわかった。「あの」影山もいたのだ。道理で空いているわけである。しかし、だからと言って逃げるわけにも行かない。少しだけだが彼の方で顔を上げたので、もう覚えられただろう。みんなも彼のことは聞いているし、やはり好感は持っていない。加越の話では「安いのにとってもおいしい」はずの餃子も、腹に収まった気がしなかった。

さて、一通りのイベントが済むと、生徒たちは再び校内の厳しい現実と直面することとなった。つまり「影山対策」である。

風紀委員に強制移籍された沖田悟は、「憲兵隊」の班長にこう進言した。

「ハンチョー！影山たちの暴走にはもう耐えられません。連中が集まっているところへ一気に攻勢に出ましょう。……ただ攻勢に出るのでは味方の損害も相当なものになるはずですよ。私に理科室の実験機材の使用許可を下さい！一時間もあれば催眠ガスを作ってみせます。これを使って連中を一網打尽にするのです」

だが、班長はのってこなかった。

「そのガスをどうするんだ？」

一瞬ひるむ沖田。

「第一オレたちもガスマスク持ってないぜ。それに、オレたちだけでどーせいちゅーねん」 窮鼠猫を噛む。沖田は暴発した。

「ハンチョー！彼らはもはや放ってはおけません。それにこのまま見過ごせば、我々憲兵隊の名折れ！ここはやはり打って出るべきです！」

「……お前、何か勘違いしてるだろ」班長は白けていた。「憲兵隊ってのはな。クズの寄せ集めのことを茶化して言ってることなんだぜ」

沖田は毒を抜かれた。

「……しかしまあ、まるきり使えないこともないか。そうさな、とりあえず催涙ガスも作るだけ作つといてもらおうか。あと、ガスマスクもな。武生さんにはオレから話つける」

同じころ坂井も積極策に打って出ている。カナダから帰ったばかりの宇垣のところへ、直談判に乗り込んだのだ。F11Fで宇垣の乗艦「ピサイド」に強行着艦したのである。突入の方法も方法だったから坂井はかなり身構えていたのだが、彼女を迎えた宇垣はずいぶん平静だった。

「最近ハルが目をかけてるのはお前さんか？」凄みも何も感じられない、柔らかな物腰だ。坂井はいささか気を抜かれてしまった。「……で、何の用なんだ」

「……か、影山のことなんです、けど」乗りかかった船。坂井は勢いに任せてまくし立てた。「生徒会に手を貸せとか、風紀に義理立てしろとは言いません。けど、あんな連中、あなたは許せるんですか？そんなの中立じゃなくて、ただの弱虫の卑怯ものですよ！」

さすがに副官の山城は怒った。

「あんた、口のきき方に少し気をつけなさい！」

「まあ待て待て」宇垣は艦隊司令の席から立ち上がり、坂井に歩み寄った。さすがに怖くなってきたが、坂井は一步も動けなかった。宇垣の右手がゆっくり上がる。思わず目を閉じてしまった彼女だったが、平手も拳骨もいつまでたってもこなかった。ただ、あごを持ち上げられただけだった。

「どっちが弱虫だかわかりやしねえ」宇垣は真正面からじっくり目をのぞき込んで言った。「いいか。オレはやる時ややる。……わかるか、この意味？」

今や坂井は「宇垣の怖さ」を骨身にしみて味わっていた。つまり、本当に怖いのは腕力そのものではなく、内身から発せられる「何か」なのだ。坂井の腰はもう抜けていた。

「……わからんようだから言っちゃろ。今からオレが出てったら、風紀のメンツは丸潰れだ。連中の立場はどうなる。生徒は風紀を軽く見るようになるぞ。それだけじゃねえや、汚ねえことはハナからオレらに押しつけるハラで、ここがメタクソになっちまう。オレはあと1年ちょっとでここ出んのに、だぜ。この学校をシメるのは生徒会なのがスジ……だからな、生徒がテメエでテメエのケツを拭くようではなきゃいけねえわけだ。今のうちには連中に任せる。いよいよドンパチになって、何とかしのげりやそれでよし。ダメなようならそこではじめて首を突っ込む。それじゃ不満か」

「……」

坂井は全身の血が下っていく轟音を確かに耳にしていた。……そして、気絶した。

「……仕方ネー奴だな」

あとは彼女は、下級生たちに委ねられていた。

それはそれとして、F-16に乗った男子部生徒の間では「ハリアーみたいなタイガー」が警戒されるようになっていた。これは坂井のF11Fで、塗色が濃緑／ライトグレーのボカシ迷彩であるところから形容されたものだ。影山がF-16に乗っているからだが、彼女以外はそれを知らない。とにかくF-16と見ると誰彼構わず襲いかかるから怖い。大概はかわせるのだが、それにしてもだいぶ滞空時間が伸びたことは、かなりの脅威である。艦長の本庄が一再ならずたしなめたほどだ。

しかしどうしたことか、本命の影山機にはなかなか当たれないのだった。この辺が怒りとフラストレーションをたまらせるところだ。

10 / 24 ~ 26 は中間試験の期間だった。誰もが派手なことはせず、ただまじめにそこそこの点をおさめるべく努力している。ムリもなかろう。特に何もしないで適当に暮らしていたのは、まあ、宇垣と影山ぐらいのものだった。

今回のPC (1 保留)

高校 男子部 普通科

A組 影山 翔 (勝 譲二)

理数科

H組 沖田 悟 菅原 絵馬

女子部 普通科

A組 伊藤 早苗 加越 京子 坂井 法子 初雁 つばめ

中学 女子部 A組 井村 真知子

その他のリアクション

・影山翔

夜中に抜け出して千里浜で遊ぶが、地元の不良とこぜり合いになる。結局勝ってしまう。風紀その他にはまったく気付かれなかった。

・沖田悟

風紀の批判をやったら、途端に委員会内に女子生徒のみの「沖田当番」が決められ、日替りで放課後に見張りがつくようになった。「女子恐怖症」を逆手に取られたもの。

・菅原絵馬

失意の沖田を思いやって彼の分もノートを取る。影山対策として木刀を持ち歩くようになった。表向きの理由は「このところ物騒だから」。永平寺では女子をいたわり友好関係を深めようとしたものの、あまり効果はなかった模様。剣道部ルートで秘密裏に運動部回りで影山対策グループを構成にかかる。影山が永平寺に行っている間だったので、本人には気付かれなかった。

・伊藤早苗

達磨忌に笑い袋を持ち込んだものの、タイミングを逸して使えなかった。永平寺では持ち込んだ缶詰で腹をつなぐ。坂井のツテでMF主将の栗田はるなに直訴し、A-7からシーハリアーに移してもらう。所属は初雁の「摩周丸」。坂井の分の欠員を埋める形。試験はトップ。

・加越京子

「第七餃子」事件以後、学校に帰ってからはしばらくショックで寝込んだ。中間試験では級内ドン尻。始めは隠していたが、後でバレてかなり笑われる。文芸部に入る。模型部はMA。M1A1エイブラムスの車長。

・坂井法子

試験前なので日本GP行きは結局キャンセル。ボヤいているうちに試験日が来て、試験の結果は加越の一つ上だった。あっさり公表してしまったので特に話題にもならず済む。

・初雁つばめ

試験は平凡。達磨忌では何も見ずに般若真経を暗唱し切り、まわりの生徒を引かせる。ずっと市販の時刻表とダイヤ専門雑誌を見比べて過ごす。MS主将の栗田榛名から話を聞いて、「摩周丸」にローラント短SAMセットを二つ取り付けた。

・井村真知子

とにかく自分の船をきれいにする。試験では級内トップ。坂井に頼んでシーハリアーに乗せてもらおうとしたものの、既にF11Fに乗り換えていてできなかった。

知ってて得する真鶴豆知識

・それぞれの模型部の編成…大体大まかなところでは、原作通り男子部がアメリカ軍、女子部が自衛隊にイギリス軍と米軍空母を加えたようなのを基本としています。これは私がこのぐらしかわからないのもありますが、もっと言えば原作者のフランス嫌いが影響しています。いわく、「模型部持ちの品にフランス製を入れるな」。私は別に構わないと思うんですがねー。何せ親父はクレッソンが出る前からの筋金入りのフランス嫌いだから。だから、どうしてもミラージュとかAMXタンクとか使いたかったら、自分で買ってくるしかないですね。

## 校長から

みんな影山対策にとらわれてるでしょ。イカンな一、そんなこっちゃ。

さて、今回の中間テストで、「基準値」が変わりました。今度は体力の方も記入して下さいね。本当は実際にテストするつもりだったんですが、問題の方が間にあわなくて、でもって前回のテストの結果と各能力値のそれぞれを使って今回の点を決めました。今後も似たような事態が発生すればこの方法で行きます。よろしく。それから、各スタッフの皆さんに水増しキャラを作ってもらう件、会長のゴーサインを得ましたので実行します。既に今回から宇垣が一人入れましたが（加越ですよ）、それぞれ指定先にキャラを作ってください。細かい要領は私信の方に書きます。次回は12月（申し訳ない！）。イベントは期末試験と臘八摂心。試験は12月10～13日に行われ、それ以後22日の終業式まで試験休みで授業はなし（寮にはいなくてはなりません）。23日から冬休みです。

臘八摂心というのは、12月1～8日に連続して行われる、早朝参禅会です。任意ですが全部出ると賞状がもらえて、しかも成績表の平均に「品行方正」ということでちょっとゲタがつかます。最終日には大福が出入り業者から振る舞われるので、この日だけ人数が倍になるというエピソード付きです。時間は朝7時ちょうどから45分。永平寺のとは違って連策は仏教青年会の会員がやるので、割と甘いです。中には強いのもいますが…それはその日の運です。

Presented by  
**EX-SYSTEM**

え-ゆ-か-コは  
やめい  
ゆ-とろ-か  
胸にトモ  
入れよ、2か所に...



<経過報告>

難航するかに思われた「U&Kカンパニー支部長誘拐事件」であるが、ショウとジュンの捜査により僅かながら手懸かりを得ることができた。しかし、残された時間は、そう多くはなかった……

7、襲撃  
(REPORTER:ユウ)

「ごくろうさん。で、その彼の方は？」

「今まで通りにやるように言うてある。変な動き見せたら娘さん殺されてまうよつてにな。せやけど、さっさとケリつけんと時間ないで。素人やさかいに、あの演技やったら、じきにばれてまうわ」

「わかってる。じゃ、悪いけど屋敷の外回り、頼むわ」

部屋を出て行くショウを見送った俺は、対応策の検討に入った。

犯人グループの使用した武器については例のガン・スミス——アレックス＝ジョーンズが構造から欠点まで全て教えてくれたからなんとかなる。問題は、犯人グループが何者なのかはまだはっきりしていないと言うことだ。本当にただの身の代金目当てなのか、それとも他に目的があるのか。下手な共産主義者のグループなんかだったら、支部長の命はない。まあ、身の代金要求してくるぐらいだから、支部長はまだ生きています。新しい人質を欲しがらうてのがどうもひっかかる。

それに交渉人の安否も……あれ？

「そういえば、交渉人って誰なんだ？」

肝心なことを忘れてた。

何で今の今まで気が付かなかつたんだろ？

早速エドモンドのところに電話した。

「そういえば、それに関しては資料をお渡ししていませんでしたね。早速お届けします」

とは言ったものの消息を断って長い訳だから、普通なら生きてはいないだろう。

仕事を放棄して逃げ出したか、犯人側に付いたのでなければ……

「まさか、ね」

しばらくすると、車のエンジン音が聞こえた。この音は、たぶんエドモンドのリムジンだろう。

予想通り、ドスドスと大きな足音が聞こえ、部屋のドアがロックされた。

やっぱり、エドモンドだった。

「夜分すみません。どうも気にかかったものですから」

「いえ。それよりも、屋敷の周辺に不審な人影が……」

資料の入った袋を俺に手渡ししながら、エドモンドが心配そうに俺の顔を見た。

そろそろ信用なくなってきたのかな？

「大丈夫。シルビアさんには色々とおきました。それにむこうが準備してるとしても、こっちも準備はしてあるんです」

なにしろ、昼間っから彼女——シルビア＝ニクラウスは俺にべったりなのだ（といっても、むこうは俺のことを女だと思い込んでいるのだが）。色々話す時間は嫌という程ある。だから、その時間を利用して、俺は彼女に簡単な護身術——ポケット・レイガンやスタン・ガンの使い方や、捕まった場合の対処法などを教えておいた。

とは言っても、彼女のレベルでは本格的な技術は身につかない。というより、時間がない。だから、敵が一人の場合はともかくとして、複数に襲われた時は余計な抵抗はしないので大人しく捕まるように言っておいた。

後は俺達が（彼女に話した時は「私達が」だったけど）必ず助け出すから信じて待っていて欲しいと。

彼女は素直に納得し、「私、おねえさまを信じます♡」などと瞳をうるうるさせながら言ったもんだ。

……………完全に何かを間違えてる。

「そういう訳ですから」

そう言いながら、俺は資料に目を落とした。

交渉人の名はグレッグ＝ボーマン。資料を見た限りでは、この世界でも結構古株のようだが……………だとすれば、俺達が知ってて良いはずなんだけど、こういう名前でごんな顔の交渉人は記憶にない。

いや、まてよ……………この顔どっかで見たような気がするぞ。

どこだっけかな？

思い出しかけたところで、いきなり通信機ががなり出した。せっかく思い出しかけたのに、忘れちゃった！

「なんだよ？こっちは大事な考え事してたのに」

「そーゆー場合やあれへん！お客さんや。門の外に10人程！」

「いよいよお出ましか。いかげん来てくれないと、こっちも動きようがないんでね。」

「じゃ、お上がりしてもらおう。ショウは予定通り、スタンバって」

そう言って通信を切ると、俺は席を立った。

部屋を出ると、シルビアの部屋へ向かう。今はエミとジュンが付いてるはずだ。

「どうするんです？」

エドモンドがますます心配そうに聞いて来た。

「ヒロインの用意ですよ。心の準備が必要なんでね」

シルビアの部屋に言くと、エミが一人でシルビアの相手をしていた。

「あれ？ジュンは？」

「外。ショウのとこへ行くって」

なあるね。お熱いこって。

「おねえさま、どうかなさいましたの？」

シルビアが心配そうな顔で尋ねる。性格に問題さえなけりゃ、結構可愛いんだけどね。

そういう考えを脳へ追いやって、俺は言った。

「覚悟はいい？」

一瞬、シルビアの表情が今にも泣き出しそうなものになる。

無理もない。何だかんだ言っても、まだ二十歳にもならない普通の（性格に若干の問題有りだが）女の子なのだ。ジュンと大体同い年ぐらいだが、ジュンはいくつもの修羅場をくぐり抜けて来ている。素人ではないのだから。

でも、シルビアもなかなか強い娘だった。すぐに普段の表情に戻ると、こちらに視線を戻した。

「とうとう来ましたか……………」

それでも、やはり声の震えまでは隠し通せないようだった。僅かながら、声が震えている。

「ええ。打ち合わせ通りにやって下さい。後は私達が必ず」

予定通り事を運ぶには、まず彼女の演技が重要なポイントになるのだが、あえてそ

れは言わなかつた。変なプレッシャーを与えなくなかつたからだ。ここは何も言わず、彼女を信じろしかない。

「おねえさま……」

シルビアが訴えるような視線を投げ掛けて来た。こういうのには弱いんだよ。しかも、うっすらと涙まで浮かべて。

「な、なに？」

「私、おねえさまを信じています。必ず助け出して下さると。でも……」

やっぱり怖いんだろうな。仕方がないよ。

「でも……何なの？」

「怖いんです。本当に連中が私を殺さずに人質にするのか、本当に生きてこの家に帰ってこれるのか……」

そう言っただけで、シルビアは俯いてしまった。困ったなあ、どうすりゃいいんだ？

「だから、おねえさま……」

「な、なに？」

このパターンが多いなあ、なんかやりにくいよ。

「私に……勇気をください」

そう言っただけで、シルビアは目を閉じた。

げ！この展開は……

思わずエミの方に助けを求めたくなってしまう。

エミの方を見ると、

「女の子に恥かかすんじゃない！」

という抗議の視線が飛んで来た。

こういう展開って、すっごく苦手なんだよお。ただでさえ、女の子相手にこういうのって恥ずかしいのに……向こうの気持ちがわかってるから……

仕方ないわなあ……

こころなりのヤケよ!!何でもやってやらあ!!

俺は覚悟を決めると、シルビアの両肩に手を置いた。

「わかつたわ。シルビア、あなたに勇気をあげる……だから……」

そして、ゆっくりと顔をシルビアの顔に近づけた。

「私達を信じて……」

「よっ！ラブコメ男!!……ちゃうな、今回ばかりはラブコメ女やな」

待機場所に着くなり、ショウがそう言って笑った。

しまった……監視用のカメラが生きてたのか……

「余計な事言わなから、さっさとスタンバイしろ!!」

「へいへい。わかつたから、そのうち赤になって怒らんとってや」

こんなのやろお。今に見てろよお。そのうち笑い返してやんだから!

俺は静かな怒りを胸にショウを見送り、モニターに視線を向けた。屋敷内の監視カメラとリンクした十数台の小型モニターに、屋敷内の状況が映し出されていた。

「今のところ、まだ侵入してないようね」

表門のモニターを見ながらエミが言った。

「あ、まあ、普通そういう輩は表から堂々とは入ってこないの。裏から来るのがセオリーでしょうに」

「でもさ」

今度はジュン。

「表から来たよ」

表門のモニターには、武装した十数人の輩が侵入して来るのが映っていた。こいつら、何考えてんだ？それとも、よっぽど自信があるのか？

まあ、おそくは後者だろう。なにしろ、二人の人質をとったも同然なのだ。こちら



が容易に手を出せないのは百も承知だろう。だから堂々と正面から来たわけだ。問題は、シルビアの演技だ。ここで連中が気付いてしまうと、全ては最悪の事態へと突入する事になってしまう。不自然さを悟られたら負けなのだ。

モニターの中のシルビアは、明らかに敵襲を恐れていた。ま、当然と言えば当然で、平気で居られる俺達の方が、異常と言えば異常なのだ。

「敵さん、屋敷の中に入ったみたい」

まもなく、廊下のモニターに連中の姿が映った。屋敷の使用人たちは自室に避難させてある。おそらく連中はシルビアの部屋が何処なのかを事前に調べていたのだろう。

他の部屋には目もくれず、まっすぐシルビアの部屋に向かっている。

「いよいよ………だな」

## 8. 追跡

(REPORTER: ショウ)

「連中が屋敷から出ました。表門の外で車で逃走します」

どうやら、うまいこといったみたいやな。

まあ、ああゆう状況になったら普通の人間やったら演技も何もあったもんやないやろ。あの娘さんも、そないな神経図太そうな人やなかったし。そやから、演技やのうて、ほんまに怖がったんちゃうかな。それやったら、多分ばれてへんやろ。

「よっしゃ。ほな、行こか」

ゼーダのタービンエンジンが低い唸りをあげ、ディスプレイに地形と目標の位置が表示される。こっから俺らの出番や。

「しっかりたのむで」

「任せて下さい」

俺とゼーダは暗闇の中を走り出した。敵さんを尾行するわけやから、気付かれたらあかん。こないな田舎やったら、ただでさえ交通量が少ないから、ライトの明かりで怪しまれてまう。

そやから、ゼーダに搭載されとる地形追跡レーダーと慣性航法装置、地図参照装置によるナビゲーションを受けて無灯火で連中の車を追うわけや。これやったら、エンジン音聞かされて走りゃ、絶対ばれやせん。それにゼーダのエンジンは小型のガスタービン。音聞かされて走りゃ、車中からやったらまず聞こえん。離され過ぎん程度について行ったらええだけや。楽勝、楽勝。

「200秒後に左コーナー。60Rから45Rの複合です。路面状態が良くありません。注意して下さい」

「わあッた！」

こっちも一応ノクト・ビジョンは付けたあるけど、細かいところまでは読み切れん。そこを指示するのと、連中の動きを追うのがゼーダの仕事。俺はそれに従ってこいつを走らすだけや。で、こっちの動きは向こうの方でトレースしとるから、後からユウらが追っかけて来っっちゃう手筈になる。それにして、連中この道に馴れとるに違いないわ。このややこしい、荒れた道をやべレーズ120km/hで走るとら。さすが俺でも、ライトなしの暗闇でこのスピードや。ゼーダのナビなしやったらきつかったかもしれん。楽勝や思たけど、そうも行きそうにあらへん。いつコケるやらかれへんぞ。

こいつら、いつまで走る気や？

「目標、停止しました。2キロ前方の家屋です」

ようやく連中がアジトに着いたみたいや。あれからだいたい一時間ぐらい走ったな。場所は屋敷から直線距離で100kmちょい離れた山ん中。隠れ家にはもってこいの



## 行け行け外回り！ ～紀州 御坊編～

11月3日

- 0620時 新横浜新幹線下りホーム、崎陽軒前に集合。行くのは提督と私。残りの連中は見送り。孝之&見孝さんのいる御坊へこれから何しに行くかと言うと、単に学園祭をのぞきに行くだけのこと。
- 0627時 ひかり101号乗車。14号車指定席。3人が万歳コールをやるので、周囲の白い視線を浴びる。DE席(山側2列)だったし、新婚と間違われたかも♡
- 0640時 小田原停車。半分以上しかいなかったのが、ここから満席になる。提督から文についていろいろ注意を受けるが、そんな事はガンチュー(註1)。私は私でやりたいように書く予定。

この後、三島～名古屋の間は二人ともしっかり寝てしまう。半年も学生やってると、やはり朝には弱くなるらしい。0854の京都到着時、話はすっかりY談化していた。水を向けたのは、確か私だったと思う……。でも全部東スポが悪い。

- 0907時 「スーパーくろしお7号」に乗車。自由席だったが、幸運にもガラ空きで座れた。とりあえず京都を越えたことを祝ってビールを飲み交わす。(註2)指定が取れないのにこれは謎だと思ったが、提督の話ではこの列車、7号車から後のハコは白浜まで、どうやらそれが効いているらしい。  
ハコは「モハ380-503」。381系のアコモ改造車。振り子の原理で多曲線区間のスピードアップを図ることで名高い車両だが、京都のポイントで早くもエラく揺れる。頭痛い。提督の煙草の量が多いのでたしなめるが、「キンチョーがねー」の一言で片付けられてしまった。もう6本も吸ってる。
- 1006時 天王寺を出たら、途端に電灯が非常灯になる。交直流切り替えはないはずだが、なぜだろう。また、ここから満席になった。関西弁の洪水である。
- 1115時 御坊の手前でデッキにでたら、途端にそばでうずくまってた子供が吐いた。このハコ、酔い易いことでも有名なのだ。
- 1117時 御坊下車。とりあえず駅前食堂でカツ丼。
- 1200時ごろ がらんとした駅前広場で線路を眺める。バスが出ないのでしかたない。
- 1220時 ようやくバスが出る。一時間一本なのだ。
- 1300時 バスを降りる。目の前に展開された光景に、提督思わず「真鶴だァ!」。  
そう、和歌山高専は海岸にある半寮校だったのだ。
- 1330時 適当に校内をうろついてから、SF研へ。タカさんがここで待ってるのだ。  
見たら結構好男子♡で、よせばいいのに提督がへたな芝居を一発うった。  
菊「あの、林さんというのはどちらでしょうか？」  
孝「あ、私です」  
菊「…今ここでこれを渡すように頼まれたんですが…」  
(おもむろにAS18の入った封筒を取り出す)  
菊「…あの、まだお気付きになりませんか？」  
孝「いや、わかりました」  
菊「ハ、どーもどーも、はじめまして。これが三浦です。ですみませんけど荷物置くところは…」  
私に言わせりゃやる前からバレてた。つまんない。
- 1800時 SF研のイベント「プラネタリウム」工事現場へお邪魔する。これがほんとに「工事」という感じ。直径5mはありそうな(目測)ドームをポリパイプ/和紙張りで形成、そこへ穴あきボウルを使って投影するというもの。各部の支持が理科オンチの私にもヤワに見える。お父さんの仕事の関係で意匠工学を少しかじっている提督があれこれ口をはさむが、無残にボロを出しまくって敗退。「生兵法」の標本。テキモさすがは専門家。だから言わないこっちゃない。

- 1830時 アニ研の店番に移行。以後帰るまで、こっちが本拠地になる。何しろスタッフスペースがこっちにはあるので居心地がいい。女子部員の方がスパゲティを作ってくれることになったので(註3)、夕食を食べに行くのを中止。SF研のOB(?)が来て、延々水滸伝の講釈が始まる。提督と私は基本的に中国古典は苦手(除三国志演義初期)、タカさんもご同様らしく、聴衆3人がみなボート状態になる。徹夜続きだったらしいタカさんが特に重傷。
- 2000時ごろ スパゲティがまだ来ない。特に提督が落ち着きを失う。腹が減るとロクに考えもまとまらない人なのだ。
- 2030時 ようやくスパゲティ到着。20×40×10くらいの大きなタッパーに大盛りになっていた。いくらかふやけていたけれど、空きっ腹には大変効く。少し余裕が出てから、提督が「辛い」と言い始める。ソースの加減らしい(註4)。にしても、罰当たり!結局残ったとは言え、これがなかったら、私ら二人は行き倒れも有りえたのに。
- 2130時ごろ 「スパゲティ」女子部員さんが帰る。
- 2200時過ぎ タカさんダウン。Heavyな寝息。 Cottonのイラストを描いてた最中だった。提督は「榛名」を執筆中。私は部のアニメメディアを見てた。
- 2400時過ぎ 提督ダウン。私一人起きてるのもオマヌーなので、寝る。机にうつぶせ。居眠りの要領。
- 11月4日
- 0600時ごろ 提督に起こされる。みんな寝てる。トイレを済ませてグレン・ミラーで時間を潰す。提督はNOBU-SONSのニューアルバム。榛名執筆再開。8時ごろまでに一話上がる。
- 0830時 ジャリが来る。他の人が対応してたが、そろそろナンなのでタカさんを提督が起こす。
- 0900時 外へカエルコールしに行く。
- 1000時 寮を見物。「真鶴」シリーズの参考のため。予想外のHeavyさに声も出ない。
- 1400時ごろ プラネタリウム見物。So niceなでき。提督感嘆。元テイクオフ(註5)参加者と出会う。この頃から提督がおかしくなる。寝冷えしたらしい。彼曰く、昨日の食堂の暖房でのどをやられて以来とのこと。
- 1500時 タカさんの風邪薬をもらう。念のため私も飲む。
- 1830時 高専をあとにする。今度は全員で来たいぐらい、みんなよくしてくれた。こっちは特に何したわけでもないのに。
- 1951時 風通しの良すぎる御坊の待合を出て「くろしお32号」に乗る。
- 2205時 大阪で「銀河」乗車。私ら憧れの東海道夜行。20系ならもっと良かったが、24系25型だった。私が上段。……同列だったけど、別に何もなかった。
- 11月5日
- 0618時 横浜着。岬たちが待っていた。東神奈川回りで菊名へ。

註1 「眼中にない」の意。

註2 私たちは米原から西へでたことが数える程度しかありません。

註3 別に私らのためではないそうです。念のため。

註4 何と全部手作りだそうです。

註5 昔あった空戦PBM。

今回の行程

往路 菊名—(横浜線)—新横浜—(ひかり101)—京都—(スーパーくろしお7号)  
—御坊—(南海御坊バス)—学園前

復路 高専—(南海御坊バス専用便)—御坊—(くろしお32号)—天王寺  
—(大阪環状線・鶴橋まわり)—大阪—(銀河)—横浜—(京浜東北線)—東神奈川  
—(横浜線)—菊名

## (有)ホビー・データのネットPBM「クレギオン・シナリオ#2」について

遊演体のネットとはまた別に、ネットワークPBMが来年からスタートします。提督が絶賛するPBM「クレギオン・シナリオ#1 はるかなるアーケイディア」の「続き」みたいなものです。ただし時代とエリアがかなり飛ぶので、前回やったキャラの継続等、ネットの閉塞化はそれほどひどくはないと思います。(そう信じています)

今から数千年経った辺境の星域に事故を起こして漂着した探査隊が、そこで我々人類と同じ(言葉まで!)種族と遭遇した、というところから話がスタートするようです。原住種族はちょうど我々で言うところの中世と似たような生活・文明レベルで、TRPGの「お約束」を大概網羅しています。王様・貴族、聖職者、農奴、神話など。探査隊の方は「スター・トレック」と似たようなもの、と思えばよいでしょう。この先どうなるかということについては、まだ何もわかりませんが、前作シナリオ#1を基に予測すると、かなりどろどろした展開になるのではないかと、思います。探査隊サイドによるなんらかの征服的行動(白人によるインディアン迫害に見られるような)が筆頭ですが。

ただし、どろどろがどろどろのまままで終ることはないでしょう。前作でも麻薬・孤児・戦争などで結構どろどろしていましたが、結果はハッピーエンドでした。要は最終的に救われる、ということです。この会社は某U演体とは違って地に足がついたりプレイ・進行をやってくれるところなので、ずっと安心して人に勧められます。……ですからね、皆さんやってみませんか?コストパフォーマンスも結構いいですよ。連絡先は次の通りです。

プレイ代金は、一年間通しでやって15800円です。試しに一回だけやってみるかという人は、3700円だけでいいそうです。これは、エントリー料2600円+月当たりの会費1100円という内訳によるもので、すべて税込です。また、これらはすべて郵便振込で入金することになっています。

既に受付は始まっています。初回からやりたいという方は1月5日までに会費を振り込めばいいそうです。

とりあえず、提督は今回ヴァンガード・ギャラガーあるいはクリスティ・エンディミオン、というキャラ(どちらも女性)で出る予定です。参加して、この名前を見かけたら、迷わず110番……じゃなかった、何か相手してやって下さい。

私たちはまたスポンサー兼ヤジ馬に回る予定です。

(文責・岬当麻)

※空技廠は、(有)ホビー・データの回し者ではありません。(笑)

## 後記

字：いまさらながらDQⅡを借りて、ロンダルキア山地で二〇三高地やっています。もうイヤ、こんな生活。

岬：親父が倒れた。姐さんが編集した。見事に遅れた。ここんどこ何でも裏目に出っ放し。

長：ナニ、MR休載？テロかーっ!?

香：予告。船PBMを近いうち開設します。

永：会長。君のために読経して進ぜよう。

(頼むからそれだけはよしてくれ：菊)

トクメ(笑)

見：何故タカさんの春麗に勝てない?!こっちは最強のガイルなのに……。

孝：求ム！ファンタジー系PBM。誰か私に情報を下さい。

E：STAR BLADE、XEXEX、STEEL GUNNER、X68K版のSTAR WARS……か、金が……(涙)

D：ワープロが欲しい～

菊：胃薬が友達。ほとんどグロッキー状態です。日々が辛い。厄月だわ。何とかならんかな。

## Staff

編集長：宇垣麻美 / 編集補佐：永平寺九頭龍  
香津美どぶろく / 筆者：本居こじ  
Damyan=Kizaki 見孝秀一 岬当麻  
絵：孝行始 EPST-DARIUS 5 (脱稿順)

Blowers 第4号

第2巻第4号(通巻5号)

平成3年11月18日発行

代価300円

(送料別)

編集人 宇垣麻美

発行人 菊地研一郎

発行所・印刷所 「空技廠」

※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。

今月の表紙

「STAR BLADE」

画・EPST DARIUS-5

今月の裏表紙

……無題、かな。83%縮小済み。

画：EPST DARIUS-5

次号は多分 ただのりなさんの表紙です。

次号は来年頭には発行したいと思います。会長の容態次第では12月末の発行も夢じゃないはずなので、励ましてあげてネ♡ (宇垣)

